



よいことの
ために
手を取りあおう

会報

WEEKLY REPORT

2025-26 R.I.会長

フランチェスコ・アレツツォ
第2500地区第6分区帯広北ロータリークラブ

会長／荒木 樹

副会長／一宮 綾子

幹事／齊藤 政樹

[四つのテスト] 1. 真実かどうか 2. みんなに公平か 3. 好意と友情を深めるか 4. みんなのためになるかどうか

第3180回 例会報告

2025.10.10

●例会日／金曜日〈12:30～13:30〉
●例会場／ホテル日航ノースランド帯広
●事務局／帯広市西3条南9丁目23 帯広経済センタービル東館3F
TEL 0155-25-7347

■点 鐘

荒木 樹 会長

■開会宣言

及川 悟 SAA

■ロータリーソング（奉仕の理想）

■ゲスト紹介

米山記念奨学生

フランシスコ エルトン アマデウス 様

■会 食

■会長挨拶

荒木 樹 会長



— 気候の変化と体調管理、
そして米山記念奨学会の意義 —

10月に入り、帯広の朝はぐっと冷え込みが増してきました。今朝の最低気温は1.7度、隣町の音更町駒場では氷点下2.2度を記録したとのことです。まもなく紅葉が見ごろを迎える季節ですが、一方で来週には再び20度を超える日も予想されています。

このような寒暖差の大きい時期は体調を崩しやすく、会員の皆さまにも体調管理をしっかり行っていただきたいと、会長から呼びかけがありました。

■ 米山記念奨学会とは

続いて話題は、10月のロータリー月間テーマである**「米山月間」**について。

会長からは、公益財団法人ロータリー米山記念奨学会の意義と現状について詳しい説明がありました。

同奨学会は、日本の大学・大学院などで学ぶ外国人留学生を支援する民間の奨学財団であり、1952年に創設されて以来、約25,000人以上の奨学生を支援してきました。財源は全国のロータリアンからの寄付金のみで賄われています。これは世界のロータリーでも極めて特異な形態であり、**「民間による国際理解と平和の架け橋」**として高く評価されています。

■ 厳格な選考制度と奨学生の要件

奨学金の選考は、「誰でも応募できる」ものではなく、各地区が指定する大学からの推薦を受けた者のみが応募できる**「指定校推薦制度」**を採用しています。推薦を受けた候補者は、地区選考委員会による二段階の厳しい審査を経て、最終的に奨学生として採用されます。

また、奨学生には厳格な規定が設けられており、他の奨学金との二重受給は原則禁止。違反が発覚した場合は資格の取り消しとともに、重複期間分の奨学金全額返還が求められます。

支給方法も特徴的で、奨学金は銀行振込ではなく、原則としてロータリークラブ例会にて現金で手渡しされます。これは単なる金銭支援ではなく、ロータリアンと留学生が直接顔を合わせ、交流を深める場としての意味を持っています。

■ 全国と地区の現状

2025年度（2025年4月採用）の奨学生は、全国で964名。年間予算規模は約13億円にのぼります。

しかし、会長からは第2500地区（北海道東部地区）における寄付状況について、少し厳しい現実も報告されました。

昨年度の地区別ランキングでは、

- ・普通寄付（会員1人あたり）は全国34地区中33位
- ・特別寄付は34位（最下位）
- ・寄付者の割合も33位

という結果でした。

一方で、法人による寄付割合は全国23位と健闘しており、企業単位での支援意識が徐々に広がっていることも紹介されました。

■ 法人寄付のすすめ

会長は続けて、法人寄付の有効性にも触れられ



ました。

米山記念奨学会は公益財団法人であるため、法人からの寄付金は損金として算入可能です。

そのため、企業経営者の会員に対しては「会社の社会貢献の一環として寄付を検討してほしい」との呼びかけがありました。

税制面でも優遇措置が受けられるため、会計士と相談の上、法人としての支援を進めることが望ましいとのことです。

■ 留学生との交流の大切さ

米山奨学会の最大の特徴は、金銭的支援にとどまらず、ロータリアンと奨学生の交流を重視している点にあります。

奨学生は「米山ファミリー」として各クラブに迎えられ、例会や奉仕活動を通じて日本文化や地域社会に触れます。

こうした日常的な交流が、真の国際理解と友情の架け橋となり、世界平和への礎を築いていくのです。

会長は、「奨学生との出会いは、単なる支援関係ではなく、お互いの人生を豊かにする学びの機会である」と強調。

これから卓話に登壇する米山奨学生との対話を通じて、会員一人ひとりがその意義を感じ取ってほしいと述べられました。

■ 結びに

最後に会長は、「季節の変わり目こそ、健康を大切に」との言葉で挨拶を締めくくりました。

気候の寒暖差が大きい十勝の秋、そして国際奉仕の理念が息づく米山記念奨学会。

地域と世界をつなぐロータリー活動の原点を、改めて感じさせるスピーチとなりました。

■ 会務報告 齋藤 政樹 幹事

- ・移動例会：10月17日(金) 12:30より開催。
- ・休会：10月24日(金)、10月31日(金)は休会。
- ・RI第2500地区 地区大会：
 - 日時: 10月24日(金)～26日(日)
 - 本会議: 10月25日(土)
 - 集合: 10月25日(土) 8:45、釧路市国際交流センター正面玄関で写真撮影。

■ 委員会報告



- ・青少年プログラム委員会（阿部委員長）
- ・ローターアクトクラブ交流会: 11月1日(土)開催。クラブからの参加者を募集中。

- ・地区代表エレクト選出: 帯広ローターアクトクラブの倉井健匠幹事が、2026年度2500地区ローターアクトクラブの地区代表エレクトに選出。



- ・社会奉仕委員会（曾我委員長）

- ・移動例会の詳細:

- 内容：フードバレーマラソンのコース（西二条メイン）の清掃活動。
- 雨天時：広小路内を清掃。
- その他：活動終了後、参加者に弁当配布。

■ ニコニコボックスの発表 一宮 綾子 副会長



- 一宮 綾子 会員 齊藤 政樹 会員
- 山本 敦 会員

■ プログラム 林 学 米山記念奨学委員長



- 米山記念奨学生
- フランシスコ エルトン アマデウス様

テーマ：「モザンビークの伝統的な食文化」

10月第1例会では、米山記念奨学生として来日中のフランシスコ・エルトン・アマドゥーさん（帯広畜産大学大学院）を講師に迎え、母国モザンビークの食文化について卓話をいただきました。

穏やかな語り口ながら、現地の生活や自然の豊かさを生き生きと伝えるエルトンさんの言葉に、会場は興味と笑顔に包まれました。

■ モザンビークという国

モザンビークはアフリカ南部に位置し、人口は2,000万人以上。公用語はポルトガル語ですが、国内には40以上の地方言語が存在し、多様な民族文化が共存しています。

国民の約8割が農業に従事しており、自然とともに生きる暮らしが今も息づいています。豊かな海岸線を持つため、魚介類が食文化に欠かせない存在です。

■ 主食と食材の特徴

モザンビークの主食はトウモロコシ。これを粉にして練り上げた「シマ」と呼ばれる粥状の料理が、毎日の食卓の中心です。食器を使わず、手で食べるのが伝統的なスタイル。

野菜では、キャッサバの葉やカボチャの葉、アマランサスなどの青菜がよく使われます。野生の



果物「マフィラ」や「マサラ」も食され、自然からの恵みを余すことなく取り入れるのが特徴です。

芋類では、キャッサバが主食に次いで重要な位置を占めます。日本でもおなじみのサツマイモも食べられますが、「日本のサツマイモより甘みが少なく、でんぷん質が多い」とエルトンさん。これが煮込み料理や揚げ物にぴったりなのだそうです。

魚介類は豊富ですが、生食の習慣はなく、焼いたりシチューにしたりしていただくのが一般的。肉類では鶏、牛、豚のほか、野生動物も地域によっては食用とされるとのことです。

■ 多文化の影響を受けた食卓

長い歴史の中で、モザンビークはヨーロッパ、アラブ、インドなどさまざまな文化と交流してきました。そのため、食文化にもその影響が色濃く残っています。

街中の市場や屋台では、パンやサモサ、ビリヤニ、ナンといった異国由来の料理が並び、香辛料や調理法の多様さがモザンビークの食文化の魅力となっています。

■ 伝統的な飲み物

エルトンさんはユーモアを交えながら、地元で親しまれている飲み物についても紹介してくれました。

- ・バオバブヨーグルト：バオバブの実から作る発酵飲料。酸味と甘みがほどよく、栄養価が高い。
- ・パルワン：ヤシの樹液から作られる甘い飲み物で、時間が経つと自然発酵してアルコール飲料になる。
- ・マフィラジュース：野生果実を搾ったジュースで、爽やかな酸味が特徴。
- ・カシューナッツの酒：アルコール度数が50度を超える強いお酒。祝い事などの特別な場で振る舞われる。

「パルワンやカシューナッツ酒は、日本では入

手が難しい」とのこと。発酵が早く鮮度が保ちにくいため、現地でしか味わえない“地酒”だそうです。

■ 会員との交流・質疑応答

卓話後の質疑応答では、会員から「日本の食べ物で好きなもの・苦手なものは？」との質問も。

エルトンさんは笑顔で「納豆やオクラなどのネバネバした食べ物は少し苦手ですが、ビールは好きです！」と答え、会場は笑いに包まれました。

また、現在の研究テーマについても紹介されました。

エルトンさんは「小さな畑の中に多様な土壌が存在する理由」を研究しており、衛星データを活用した土壌分析モデルを構築中とのこと。モザンビークやアフリカ全体の農業発展に貢献したいという強い思いを語られました。

■ 食文化が語る「アイデンティティ」

卓話の締めくくりに、エルトンさんは次のように語りました。

「この世に“唯一最高の食べ物”はありません。

すべての食べ物は、それぞれの土地の文化や歴史、そして人々のアイデンティティを映す特別な存在です。」

世界各地の食文化を尊重し、できる限り多くの食を体験すること。

それが異文化理解の第一歩であり、国際交流の心だとエルトンさんは語りかけました。

■ 終わりに

エルトンさんの穏やかで誠実な語りからは、母国への誇りと、日本での学びへの真摯な姿勢が感じられました。

ロータリーの米山記念奨学会が育む「学びと友情の絆」が、まさにこの日の例会で具体的な形となって伝わったように思います。

モザンビークの食文化を通じて、“食”がつなぐ国際理解の可能性を感じる卓話となりました。

■ 次週のプログラム予定

「移動例会」

■ 閉会宣言 及川 悟 SAA

■ 点鐘 荒木 樹 会長

**例会
案内**

〈月曜日〉 広尾RC: 日高信金広尾支店

帯広南RC: 北海道ホテル

〈火曜日〉 芽室RC: めむろーどセミナー

帯広東RC: ホテル日航ノースランド

〈水曜日〉 帯広RC: ホテル日航ノースランド

上士幌RC: 川村福祉会館

音更RC: ハビオ木野

〈木曜日〉 足寄RC: 足寄銀河ホール21

清水RC: 清水町中央公民館

帯広西RC: 北海道ホテル

■ 出席報告 / 渡辺 紘生 出席委員長

会員数	計算に用いる 会 員 数	ホームクラブ 出 席 数	マークアップ	欠 席	出席率
58					44.64%